

勇者と魔王が哲学と対話について哲学対話してみた —勇者ハラ・タイワとその仲間達 VS 魔王「鉄のガクト」—

及川一郎（「哲学カフェ・哲学対話ガイド」管理人）

哲学と対話という不思議な関係を描くなら対話篇しかない！
どうせ書くなら楽しく読んでもらえるよう物語形式にしよう！
と書いてみたら思いっきり脱線しちゃいました。すみません。

1. 決戦

三人は魔王城の奥深くにある魔王の部屋の前に立っている。

真ん中で剣を持っているのは勇者タイワ。勇者と言うよりまだ少年と言ったほうがいい顔立ちだ。タイワは名もなき小さな村に木こりの息子として生まれたが、不思議な偶然に導かれて勇者となり、長い旅を経て、ついにここにたどり着いた。この冒険の旅は

まさに危険の連続だった。信頼できる仲間がいなければ乗り越えることはできなかつただろう。

タイワは右側に立つジョンに目をやった。彼は少し緊張した表情で手元の弩をなでている。ジョンはタイワの幼馴染で弩の天才だ。何度、彼の狙撃の腕に助けられたかわからない。

そしてタイワは左側に立つラクシュミーと目を合わせた。彼女は旅の途中で悪徳商人の奴隷となっていたところを助けたのが縁で仲間に加わった。東方出身の彼女が使う不思議な白魔法は傷ついたタイワ達を癒やしてくれた。この戦いが終わったら、皆で彼女の国にも行ってみよう、とタ

開拓の扉

イワは思う。

三人は大きく深呼吸し、重く大きな扉を開ける。本当に長い旅だった。そんな旅もここで終わる。

2. 応酬

広い部屋にたった一つだけ置かれた調度品、玉座に彼は座っていた。

魔王。またの名は鉄（くろがね）のガクト。5年前、突如として現れ、テツガクの力により、この国から全ての微笑みと優しさを奪った男。

ジョン「魔王って言うから、どんな奴かと思ったけど、意外と小さいんだな。普通の人間サイズか。鉄のガクトと呼ばれるだけあって、変な鉄仮面を被っていやがる。こんな奴、俺一人で十分だ。」

魔王「ははは、威勢がいいな小僧ども。やめておけ。こんな子供にワシを倒す力などある訳がない。」

ジョンは自慢の弩を取り出し、魔

王に狙いを定める。

ジョン「魔王！お前の発言の弱点を見つけたぞ。子供だということは、魔王を倒す力がないことの論拠にはならない！くらえ、秘技「対人論証」！」

矢は魔王が持つワイングラスを叩き割った。

ジョン「ちっ、運のいい奴。」

魔王「これは失礼した。どうやら、こちらも本気にならないかならなければならないようだな。」

魔王はワインで赤く染まったマントを脱ぎ捨て、立ち上がった。

ラクシュミー「次は私に任せて。」

ラクシュミーは杖で魔法陣を描き、呪文の詠唱を始める。

ラクシュミー「暴力により王となり、民を支配するなんて間違っている。すべての人は平等に理性という正しさを持っているのよ。焼き尽くせ、白魔法「デモクラシー」！」

杖の先からほとぼしった白い炎が魔王を包む。

開拓の扉

魔王「ははは甘いな。すべての者が理性を持っているなら、ワシだって理性を持っていることにな
るではないか。理性を持ち、更に神から強大な力まで与えられたワシの支配にこそ民は従うべきなのだ。黒魔法「リヴァイアサン」！」

魔王の体から黒い炎が湧き立ち、白い炎を中和したかと思うと、更に広がり三人を包み込む。黒い炎の中に苦しむ三人のシルエットが浮かぶ。

魔王「残念だったな。全ての思想には反対の思想があるように、全ての攻撃魔法には反対の攻撃魔法がある。最後に勝負を決めるのは、魔法や思想の内容ではなく魔力や弁論の強さなのだ。自らの未熟を呪いつつ、焼け死ぬがよい。」この魔王の言葉に、タイワの胸につけた勇者の紋章が反応して光り、たちまち黒い炎を鎮めた。いにしえの勇者ハラのが封印されたこの紋章は、このように魔法を発動して何度もタイワ達を救

ってくれたのだ。

魔王「しまった、ワシとしたことが口が滑ったようだ。これは古代魔法「プロタゴラス」か。全ての魔法を相対化することにより、魔力の絶対的な力を奪い無力化するとは。しかし、その傷ついた体でこれ以上戦えるかな。」

魔王は、倒れた三人のもとに一歩ずつ近づいてくる。

ラクシュミーはなんとか体を起こし、タイワとジョンの手をとる。

ラクシュミー「魔力を無駄遣いしちゃったから、これが最後の白魔法ね。タイワ、あとは、あなたの勇者の力に任せる。回復魔法「タブラ・ラサ」。人よ、生来の姿にもどれ。」

魔法の白い光が三人を包み、彼らを癒やす。

そして光が消えたとき、魔王と三人は、剣を振れば届くほどの距離で対峙していた。

開拓の扉

3. 秘技

決着の時が来たようだ。

魔王「最後の魔法を教えてやろう。召喚魔法「方法的懷疑」だ。全能の悪霊の力により、お前の論証の息の根を止めてやろう。」

ジョン「方法的懷疑！旅の途中で会ったカントじいさんが教えてくれた魔王の得意技じゃないか。タイワ、カントじいさんがくれた巻物で魔法を防ぐんだ！」

ジョンはタイワに「超越論的論証」と書かれた古びた巻物を手渡そうとした。

タイワ「だめだ。自分が理解していない哲学の力を借りても奴には勝てない。借り物の言葉じゃなくて、僕達の言葉で対話をしよう。奴が魔法を発動させる前に僕達の攻撃を叩き込むんだ。」

魔王「面白い。お前たちの攻撃とやら、見せてもらおうか。」

魔王は更に一步を踏み出した。ジョン「いいぞ、お前の間合いだ。タイワ、お前の必殺技「オッカム

の剃刀」で全ての論理を切り刻んでやれ！」

タイワ「いや僕だけの力では足りない。ここは僕達三人の力を合わせるべきだ。これまでの旅で培ってきた僕達の対話の力を見せてやるんだ。来る日も来る日も僕達三人は対話を続けてきたじゃないか。」

ジョンとラクシュミーは頷き、それぞれの武器を構える。

ジョン「この弩に込めよう。俺の批判的精神！」

ラクシュミー「この杖に込めよう。私のケア的精神！」

タイワは、勇者の剣を天に掲げる。タイワ「この剣に込めよう。僕の創造的精神！」

三人「君に届け、僕達の対話の力！」

閃光がきらめき、魔王は風圧により後方に吹き飛ばされた。そして、その体ははるか遠くの壁に食い込んで止まった。魔王は崩れ落ち、膝を付き、肩で荒い息をしている。鉄仮面はひび割れ、うつむ

開拓の扉

いた顔からは血が滴り落ちていくようだ。

魔王「ハア、ハア・・・これが対話の力か。一人の哲学より三人の哲学のほうが強いということなのか・・・

・・・なんだ、この今まで味わったことのない感覚は。何かわからないが繰り返し襲ってくるこの感覚は。これが痛みなのか。苦しみなのか。落胆なのか。後悔なのか・・・

・・・いや、そうではない。これは感覚Sだ。これも感覚Sだ。そしてこれも感覚Sだ・・・」

ジョン「何を訳のわからねえことを言ってやがる。お前のその感覚は敗北感というやつだ！」

ラクシュミー「いけない！これは私的言語！」

魔王はにやりと笑う。

魔王「ふふふ、敗北感か。ジョンとやら。感覚Sに名前を付けてくれたことに感謝する。これで私は実存の領域に入り、禁忌の呪文を

唱えることができる。哲学には対話が届かない領域もあるということを見せてやろう。実存魔法「クオリアの逆転」！」

世界がポジとネガのように反転し、漆黒の闇が三人をつつむ。いや漆黒が本当に漆黒なのかさえわからぬ漆黒の闇と言ったほうがいいのかもかもしれない。

そのとき、ラクシュミーは目を見開き魔王を見据えて叫んだ。ラクシュミー「やっぱりあなたのね！魔王、いやシヴァ、まだわからないの？あなたの顔を覆う鉄仮面はもう取れているのよ。」

4. 過去

魔王は狼狽して晒された素顔を手で覆う。

魔王「何を言っている。私は魔王ガクトだ。ガクトだ。シヴァではない・・・ガクトなのか。いや、シヴァなのか・・・」

魔王の顔を覆った手の隙間から、涙が溢れる。

魔王「ここで仮面が取れると

開拓の扉

は・・・思い出したよ、ラクシュミー、久しぶりだね。この仮面で素顔とともに記憶も封印したつもりだったのに。もう思い出すことはないと思っていたのに・・・」ジョン「ラクシュミー、どういうことだ。」

ラクシュミーは語り始めた。ラクシュミー「私とシヴァは幼馴染なの。私が東方の国に住んでいた頃、私は、私の姉パールヴァティーと、姉の許婚シヴァ、つまり後の魔王と三人でいつも一緒に過ごしていた。

三人とも哲学が好きで、よく哲学的なことを対話していたんだよ。私達が住む国をより幸せにするにはどうしたらいいか、とか、愛とは何か、なんて話を。姉さんとシヴァが愛について語り合ってる時なんて、あんまり見つめ合ってるから、私、なんだか居づらかった。なつかしいね、シヴァ。」

ラクシュミーが魔王を見つめると、魔王は少し微笑んだように

見えた。

ラクシュミー「だけど、ある日、哲学的な議論から喧嘩になって、シヴァは森にこもってしまった。

その直後、白魔術師だった父が、大病にかかった王子の治療のため宮廷から呼ばれて、シヴァに挨拶もしないまま急に家族で村を離れることになったの。だけど、旅の途中で盗賊に襲われ、父と姉さんは殺されてしまい、私は奴隷として、この西の国に連れ去られた。

その頃、テツガクを使う魔王の噂を聞き、もしかしたらシヴァかもしれないと思っていたの。」

魔王（シヴァ）「そうだったのかラクシュミー。あの後そんなことがあったとは。君たちは私に愛想をつかしたとばかり思っていたよ。

だけど君も一つだけ間違っているよ。哲学的な議論では喧嘩になどならない。哲学的な議論とは、相手の主張のどこまでを理解でき、どこから理解できないかを確

認する作業だ。そして理解できる範囲でお互いに相手の主張を育つようと努めることだ。」

魔王は、青年シヴァとして、優しく、そして淋しげな目でラクシュミーを見つめていた。

シヴァ（魔王）「君たちと離れることになる頃、私は独我論にとらわれていた。君たち姉妹を含め、他者の存在というものに哲学的な疑いを感じていたのだ。相手の存在も信じられないのに相手を尊重し、理解に努めることなどできない。君たちと対話を続けられないと思った私はこの問題を乗り越えようと、一人で森にこもり考え抜いていたのだ。」

ラクシュミー「それは違う。姉さんは言っていた。シヴァは独我論に苦しんでいる。だけど、それが哲学的な懷疑である限り、きっと対話の力が役立つはずだって。宮廷から戻ったらシヴァに会って対話の続きをするんだって。」

5. 崩壊

シヴァは顔に残っていた鉄仮面のかげらを投げ捨てながら叫んだ。

シヴァ「この話は終わりにしよう。もう遅いのだ！私はパールヴァティを失い、世界に絶望し、鉄仮面により対話と記憶と素顔を封印し、魔王ガクトとなってしまったのだ。独我論者として世界を否定し、世界を破壊しようとした私に対話する資格はない。

ラクシュミー、お前はここを離れるがよい。私はこの城とともに消えゆく。最終魔法「デウス・エクス・マキナ」！全ての物語よ、論理を超えて終末に至れ！」城全体がシヴァの声に共鳴し、崩壊を始める。

タイワ「魔王！いやシヴァ、そうはさせない。この対話には続きがあるはずだ。」

シヴァ「何を言っている。全ては終わりなのだ。お前も死にたくなかったら、ラクシュミーとともに立ち去れ！」

開拓の扉

タイワ「相手を思うその心、それさえあれば対話は続けることができる。いや、さっきお互いに相手を倒そうとしていたあのときでさえ、対話は行われていた。なぜなら、相手の強敵と認め、魔法を詠唱する、その行為こそが対話なのだから。」

シヴァとタイワの間の床に大きな亀裂が走る。

シヴァ「何を言っている。もうここは崩壊するぞ。立ち去れ！」

タイワ「いや、僕は勇者だ。勇者ハラの紋章を受け継ぐ者として、対話を求める者のことを放っておくことはできない。」

ジョン「勇者ハラ・タイワとして100点、いや1000点の答えだけ。俺もここで一緒に対話してやる。」

ラクシュミー「私も姉さんの代わりにはなれないけど、対話の相手にはなれるわ。」

振動は更に高まり、城は崩壊に近づいていく。

シヴァ「なんて命知らずなやつら

だ。こんなにも対話に命をかけるなんて。これでは私も対話を続けるしかないではないか。」

タイワ「わかってくれたか。」

シヴァ「ああ対話は続けよう。しかし、こんな場所では対話はできない。私が時空を固定しているうちに、ここを脱出するんだ。実存魔法「永遠回帰」！また会おう。それほど長くは止めてられない、急げ！」

三人は、凍ったように時が止まった景色の中を走り、崩れかかった瞬間で固定された何本もの円柱や壁の間をすり抜け、城の出口に向かって息を切らせて走った。

そして、やっとのことで、大きな門をくぐり抜け、城を出たところで振り返った。

ラクシュミー「あれ、シヴァは？」

遠くからシヴァの声がする。シヴァ「ラクシュミー、お前もこの魔法は知らなかったようだな。私が独我論に苦しむ中編み出した新しい魔法だ。「永遠回帰」は

開拓の扉

時空を固定する魔法ではない。＜私＞の＜今＞＜ここ＞の全てを受け入れ、一瞬を無限として受け入れるという極めて実存的な魔法なのだ。人は、今、ここ、から離れることはできない。私はこの崩れゆく城の中にいる。騙してすまなかった。

タイワ、お前の勇者としての対話の勇氣には感服した。しかし私の実存には対話は届かない。こんな対話が届かない哲学もあることも知っておいてほしい。それでも、対話の届かない哲学さえも、こんなふうに対話できてしまうのがまた面白いのだが。

ああ、もっと話したいところだが、魔力が尽きたようだ。さらば。」

その声とともに、時はまた動き出し、城は崩れ去った。

6. 帰路

三人は、座り込み、城がスローモーションのように消えゆく光景を呆然と見つめていた。魔王は

倒れ、この旅は終わったのだ。

三人の目からは涙が流れていた。それがシヴァとの別れの悲しさなのか、苦しい旅が終わったことの安堵なのかはわからない。

長い時間が経ち、ようやく三人は立ち上がった。

ジョン「魔王退治は思いもしない終わり方だったな。最後にシヴァから俺に一言もなかったのが腹立つけど、シヴァのこと探して葬ってやろうぜ。」

三人は、城の瓦礫の間を歩き、魔王の部屋があったあたりを探し回ったが、シヴァの姿はなかった。しかし、その代わりに一冊の本を見つけた。哲学書だ。

ラクシュミー「これはシヴァ。最後の魔力を使って、なぜ。」

タイワ「シヴァが「永遠帰帰」を唱えるときに言っていただろう。対話は続ける、また会おうって。これが彼との対話の続きなんだ。一人で本を読んで本の作者と対話するのも、一人で自問自答する

開拓の扉

のも対話なんだ。僕はこの本を読んで、シヴァが話していた彼の哲学についてゆっくり一人で考えてみたい。」

ジョン「わかった、わかった。だけど、まずは村に帰ろうぜ。そして東にあるラクシュミーとシヴァの国にも行こう。その間にその本だって読めるし、俺たち三人でいっぱい対話もできるぜ。この冒険は終わるけど、俺たちの旅はまだまだ続くんだ。」

ラクシュミー「旅と対話はどこか似てるね。」

タイワ「旅と哲学も似てるよ。そうだ、じゃあ今日の宿に着くまで、哲学対話しようか。テーマは旅だよ。」

三人は夕日に向かって大きく深呼吸し、そして歩き始めた。(おわり)

7. 注釈

本編終了後、近くの居酒屋にて。一同「出演お疲れ様～乾杯～」
シヴァ「私以外は未成年だから、

ソフトドリンクだけだぞ。」

ジョン「はいはい。じゃあページも余ってるみたいだし打ち上げついでに注釈を付けるぞ。まず名前の由来から。俺の名前はジョン・デューイからだな。作者は読んだことないくせに、プラブマテイズム哲学者のなかから適当に名前が短い奴を選んだらしい。」

タイワ「僕は当然、対話とタイワをかけてるだけ。作者がやってる哲学カフェ・ヨコハマタイワはヨコハマタイヤとかけてるし、おじさんはダジャレが好きで嫌だね。フルネームのハラ・タイワも、クイズダービーという80年代のクイズ番組に出演してた漫画家「はらたいら」先生にかけてるんだよ。ひどい。」

一同「たしかにひどい。」

シヴァ「私の魔王としての呼び名、鉄(くろがね)のガクトもイマイチだぞ。鉄ガクト、哲学徒だからな。対話と哲学で対比させたかったのだろうが、作者のことを焼き尽くしたい気分だ。」

開拓の扉

ラクシュミー「まあいいじゃない。私とシヴァ、姉のパールヴァティーはヒンズー教の神様から。シヴァとパールヴァティーは夫婦で破壊的に強い神様。ラクシュミーはシヴァと並ぶ偉大な神様ヴィシュヌの妻。美男美女カップルというイメージがあるね。」

ジョン「自分ばかり、いい名前だからって。作者はヨガやマインドフルネスにも興味があって、そのあたりの言葉も魔法に取り入れたかったからヒンズー教の神様を使っただけ。だけど結局あきらめたのは正解だな。そこまで広げたら、ネタがわかってもらえるはずないよ。」

ラクシュミー「結局、私の魔法はジョン・ロックのイメージね。「タブラ・ラサ」はともかく「デモクラシー」は安直だよ。シヴァに「リヴァイアサン！」って言わせるためだけにある魔法って感じ。」

シヴァ「ああ、哲学用語を魔法にするっていうアイディアは、ホッ

ブズの哲学書「リヴァイアサン」から思いついたらしいからな。

それにしても、私は結構な数の魔法を唱えたな。まず、「方法的懐疑」はデカルト。彼は、もしこの世が万能の悪霊が騙して見せている幻だったら、というような思考実験をやっている。独我論者で懐疑論者な作者はこういうのが好きらしい。

カントじいさんの巻物「超越論的論証」はそのままだな。デカルトの少し後の哲学者であるカントの論証によってデカルトの方法的懐疑は乗り越えられたとされる。

ここまでも結構強引だったけど、「デウス・エクス・マキナ」は哲学用語ですらなくて、古代ギリシャ悲劇から。作者がどこかで仕入れて、一度使ってみたかったそうだな。」

タイワ「一応、作者は物語や論理が理不尽に切断されるということに哲学的興味を持ってるみたいだよ。それこそが対話の終わり

開拓の扉

じゃないかって。

ところで、シヴァが記憶を取り戻す前に「感覚S」って呟いてたのは、ウィトゲンシュタインの私的言語の思考実験だよね。けど実際に「感覚S」なんて言う人、シヴァとウィトゲンシュタインしかいないよ。」

ラクシュミー「私、思わず笑っちゃいそうだったよ。だけど、「永遠回帰」は魔法っぽくていいんじゃない？これはニーチェから。ニーチェは色々と魔法にできそうな言葉が多いよね。」

ジョン「シヴァばっかりいいよな。俺なんて秘技「対人論証」！だけだぜ。クリティカルシンキング用語かな、これは。」

タイワ「僕なんて、一回もそういう場面なかったんだよ。必殺技「オッカムの剃刀」だって使わなかったし、「プロタゴラス」は紋章が光っただけだし。ちなみに「オッカムの剃刀」は中世の神学者オッカムの無駄な論理は省くべきという主張で、「プロタゴラ

ス」は相対主義を主張した古代ギリシャのソフィストの名前だね。」

ラクシュミー「作者はシヴァに自分を投影しているみたいだから口数が多くなっても仕方ないんじゃないかな。作者は黒魔法的な考えの人なのよ。きっと私の白魔法的な考えは嫌いなのね。」

シヴァ「しかし、黒魔法を使う私は、お前たち3人の力により大ダメージを受け、ついには滅びる。そこまで含めて自分を投影しているのだろうか。」

お前たちの技は、マシュー・リップマンの「探求の共同体」からだったな。P4Cの言葉により私が倒されるなんて象徴的じゃないか。

ただ、批判的精神・創造的精神・ケア的精神ではなくて、正しくは、批判的思考・創造的思考・ケア的思考。語感からちょっと変えて使ったが、きちんと訂正しておかないとまずいだろうな。」

ラクシュミー「この文章が掲載さ

開拓の扉

れる場所を考えるとね。」

ジョン「実は作者はリップマンの本はよくわからん、と思ってるらしいぜ。哲学対話についてなら俺がもっといい文章書いてやるって息巻いてた・・・」

タイワ「それ以上はまずいって。おしまい、おしまい！」

一同「デウス・エクス・マキナ！」
(本当におわり)

関西方面など手が回らないので、一緒にサイトを管理していただける方も募集中です。

8. 一言

哲学カフェ紹介サイト「哲学カフェ・哲学対話ガイド」

(<https://www.135.jp/>) を管理している「いちろう」です。

ふざけた感じですみませんでした。本人は結構真面目に書いたのですが・・・そのうち、もうちょつときちんと哲学と対話についての対話篇を書いたら、サイトにアップしたいです。

また、サイトの情報を充実していきたいので、新しい哲学カフェなど情報があればお寄せください。